

黒人差別問題を扱った読み聞かせの実践報告

村上真理*

Practice of Reading Picture Books Dealing with Racism Against Black People

MURAKAMI Mari*

Key Words: Reading Picture Books, Racism, Book Talk

1. はじめに

本稿は黒人差別の問題に学生に意識を向けてほしいとの思いから実践した活動の報告である。

2020年5月25日、米中西部ミネソタ州ミネアポリスで、黒人男性ジョージ・フロイド氏が白人元警官に首を圧迫して殺害されるという事件があった。この事件は全米で人種や年齢、性別の枠を超えて、国民が人種問題についての議論や抗議運動に取り組んだり、警察改革を求めたりする大きなきっかけとなった。新型コロナウイルスによりゴーストタウンと化した町には、連日大勢の人が集い「私たちが撃たないで」と声をあげた。黒人差別に抗議する「ブラック・ライブズ・マター (BLM=黒人の命は大切だ)」運動は全米に広がり、米社会に人種差別がはびこっていることを再認識させた。そしてこの運動にはアメリカだけでなく世界各地で賛同する抗議運動も行われ、日本でも少しずつニュースで取り上げられていった。

日本では、他国で起きていることであって自分には関係がない、白人でも黒人でもないアジア人には関係ないと思う人がいたかもしれない。しかし、人種差別は日本にも確実に存在している。

差別をしてもそれに気づいていない人が多いのかもしれない。差別をされる人の気持ちを理解することは、今まで差別について考えたことがなかったり受けた経験がなければ想像し難いであろう。そして黒人の気持ちや経験を日本人が本当に理解することは不可能だろう。しかし、わからない、知らないでいてはいけないのではないか。本校の学生には問題の現状やそれに対する世の中の動きを知ろうとする姿勢があってほしいと思い、特別活動の時間を使ってこの問題に触れることにした。

黒人差別を考えさせるには、まずその歴史背景やその時代の人々の意識といったことを教える必要がある。しかし私自身にはそういった指導経験はない。そこで黒人奴隷の

苦悩やこの問題に取り組んできた人々やその活動を、数冊の絵本を使って紹介することでこの問題に意識を向かせることにした。

紹介の仕方は次節で紹介するブックトーク^{†1}に倣ったものだが、複数冊を一度に紹介するのではなく6週間をかけて各週に1冊の読み聞かせを入れるという形式をとることにした。

2. ブックトークとは

はじめにブックトークの定義を概観する。

ブックトークとはそもそもアメリカの図書館における専門用語として使われる用語で、定義的には「教師や図書館の専門職員などが児童生徒あるいは広く図書館の利用者を対象に、特定のテーマに関するすぐれた図書群を批評や解説を試みながら順序良く紹介し、それらの図書の利用を促進しようという目的をもって行う教育活動」[2]とある。そして大人を対象にしても子供や学生を対象しても、あるいは専門家や趣味や同好会の集団を対象にしても行える、図書を紹介する活動である。その目的は、小・中・高校生にあってはこれからの読書生活を送るにあたり、その基本となる良い本への興味を喚起させたり読書習慣を育成させることであり、とても重要な教育活動として位置づけられるべき活動である。

また、定義にある「特定のテーマに関するすぐれた図書群の紹介」とあるようにブックトークには特定のテーマがある。それは例えば「平和」といった抽象的なものから「動物」といった具体的なものまで、読書に結びつくものは何でもテーマとなるが、このテーマの設定が特に青少年に対するブックトークに重点が置かれ、特色を持たせている。実践者が、そしてテーマに沿って本が持つ特徴や個性との関係を考えて紹介する図書を選定し、紹介する順序を決め

^{†1} 本実践には、村上淳子『だれでもできるブックトーク2』[1]を参考にしている。

て、テーマに対する思いを盛り込んだ語りかけのシナリオを用意して紹介していくものである。

3. 本ブックトーク実践の目的

次に本実践のねらいを明確化したい。

ブックトークの定義には、目的が「良い本への興味を喚起させたり読書習慣を育成すること」とあるが、ここでは本への興味を喚起させる前段階である、テーマについて関心を持たせること、そして自分なりの考えを持って、探求しようとする意識を持たせることに重きを置いている。

また6週間、各週に必ず本の紹介を通してテーマを思い起こす時間を与えることで、その間に周囲で起きているテーマに関連する出来事や話題に注意が向くようになって、それらの行方や真相などを知ろうとする意識が生まれることを期待している。

4. 実践で扱った絵本

ここでは本実践で扱った本6冊を紹介する。テーマとのかかわりが描かれている箇所や自身が感じたことを記録したものを、実践をどのように進めたかをここに伝えるにあたり紹介した順に記述しておきたい。

4. 1 『わたしには夢がある』[3]

「暴力ではなく言葉で権利を勝ちとるのだ」等、世界を動かし、今も人々を励まし続けるマーティン・ルーサー・キングは1963年8月28日、20万人以上の群衆を前に、民族や出身を問わず全ての人々に自由を求めた歴史に残る名演説を行った。象徴性に富んだキング牧師の言葉を絵にして表現している唯一の作品である。

4. 2 『僕の図書館カード』[4]

作家リチャード・ライトの自伝『ブラック・ボーイ』の一場面を絵本化したものである。

黒人は図書館を利用するカードさえ作れないのが当たり前前の時代に、本を読みたいと思った主人公を白人たちは笑う。主人公は理解のある白人の同僚から図書館カードを借りて初めて文学書を読む。そして読書をするうちに白人を怖い存在だと思わなくなるだけではなく、理解できるようになった。「読んだことすべてが自由への切符となった。本はぼくを何ものにもしばられない、自由な世界へとみちびいてくれたのだ」とあるように、読書をすることで新しい世界へ一歩足を踏み入れた。読書の大切さとともに困難を乗り越えるために自分の思いを人に伝える勇気を伝えている。

4. 3 『ヘンリー・ブラウンの誕生日』[5]

奴隷たちが自由を求めてアメリカ北部へ逃げるための「地下鉄道」を通して逃亡する、1800年中頃に起こった実話である。奴隷は物と同じように主人の都合で取引される。主人公は結婚を許されたがお金に困った妻の方の主人に妻と子供を売られてしまう。そんな彼は「地下鉄道」という、奴隷を手助けする組織の協力を得て逃亡を図る。それは息ができる穴を作った小さな箱に自分を詰め、ビスケット3枚という食料だけで自分を船で安全な場所へ送ることだった。27時間後に自由の身になったが愛する子供と妻には会えたのだろうか。過酷な運命のなかで人生を切り開いていった人物たちを紹介して、自由とは何かを考えさせている。

4. 4 『ローザ』[6]

ローザ・パークスは現代アメリカの象徴的な存在としてアメリカ人で知らない者はないほど尊敬されている。黒人差別が特に激しかったアラバマ州モントゴメリーではバスは白人と黒人で座る場所が決められて、その間の席にはどちらが座ってもよいとされていた。ローザはその席に座るが運転手に移動を詰め寄せられ、断ったため不正義に抗したとして逮捕される。その後の公民権運動の口火を切ることになったバス・ボイコット事件を描き、正義は貫かなければいけないことを伝えている。

4. 5 『ぬすみ聞き』[7]

多くの黒人が奴隷として物のように売り買いされていたアメリカで、奴隷として綿花の栽培に従事する家族の葛藤と運命に立ち向かう姿を描いている。主人は肝心なことは奴隷に教えない。子ども達は夕食後に主人の家の窓の下で盗み聞きをして、自分達に関わる話を家族に伝える。やがてリンカーンが大統領に選ばれたことを聞き出す。父親の「自由への道は見えてきたばかりだ。きっと長くけわしい道になる。・・・おまえたちの力がほしいのは、これからなんだ」という、希望を失わず子供に将来を託すことばが余韻を残している。

4. 6 『リンカーンとダグラス』[8]

南北戦争に関わる白人のリンカーンと元奴隷の黒人のダグラスの、相対するが互いの目標に向かって手を結ぶ様子が描かれている。二人とも独学で知識を蓄えて奴隷解放を成功させるが、そこまでの苦労とこれからも乗り越えなければならない課題を語りあう。世界をよくするために自分で考え、ひとりきりであっても小さな力であっても、行動すべきとする崇高さを教えている。

5. 実践の仕方

ここでは実践を始めるにあたりどのようにテーマに関心を引き出したか、そして本の紹介ではどのような語りかけをして本の紹介に繋げたのかを紹介する。

5. 1 ブックトークの導入

全米での運動の中で、テニスの大坂なおみ選手が、全米オープンで試合のたびに異なるマスクを着けて登場して注目を集めていた。このマスクに記されている文字はアメリカで警察の人種差別的な暴力の被害に遭った黒人犠牲者たちの名前である。そのことを話すことから、当時の報道を各自がどう感じたかを思い起こさせて黒人差別に意識を向けさせた。

5. 2 紹介での語りかけ

本の紹介には第1節で述べたように読み聞かせを行っている。ここでは読み聞かせの前に、その本とテーマとの関連を想像させるために語った言葉を記す。

5. 2. 1 『わたしには夢がある』

キング牧師という人を知っていると思います。キング牧師の演説の文言、I have a dream を聞いたことがあると思います。I have a dream の演説は肌の色にかかわらず、すべての人びとの自由と平等を求めたものです。演説はアメリカ人の心に響きました。その演説を絵本にしたものを読みます。

5. 2. 2 『僕の図書館カード』

読書をしているといろんなことを教えられます。知りたことがあるとまずその分野の本を探すことも多いと思います。この話はリチャード・ライトという黒人の生涯におきた出来事がもとになっています。主人公は本を読みたい気持ちでいっぱいでした。でも黒人は図書館が利用できません。あとがきにあるリチャード・ライトの生涯から紹介します。

5. 2. 3 『ヘンリー・ブラウンの誕生日』

奴隷は人間として扱われていませんでした。誰かの持ち物として扱われて、主人が売ると決めたら本人の気持ちに関係なく売られてしまいます。そのような中でこの本の主人公は自分を小包にして奴隷制のない地へ自分を送るという手段で自由を手に入れました。

5. 2. 4 『ローザ』

「バス・ボイコット」という言葉を聞いたことがありま

すか？主人公のローザ・パークスはアメリカの歴史の中でキング牧師と同じくらい有名な人です。黒人の地位を変えようとする行動に、ローザさんの行動がきっかけとなるバス・ボイコット事件があります。この本にはそのことが書かれています。以前は高校の英語の教科書にも載っていました。それほど大きな出来事ですから、知ってほしいと思います。

5. 2. 5 『盗み聞き』

綿花の栽培をして生活している奴隷の家族のお話です。子ども達は仕事が終わると主人の家の窓の下に隠れて、この先自分達の生活がどうなるのか、主人はどう考えているのかなどを盗み聞きして家族に伝えます。

5. 2. 6 『リンカーンとダグラス』

Government of the people, by the people, for the people.....は知っていますね。

リンカーンは大統領就任パーティーで、フレデリック・ダグラスを待っています。この人は奴隷から身を起こして黒人の地位向上のために戦った人です。アメリカ奴隷制廃止運動の中心人物の話です。同じ目標を掲げた活動をした人物のお話である『ローザ』を読みました。それに続くノンフィクションです。

6. 聞き手の反応

すべての本を紹介した後で、以前よりも黒人問題を取りあげた報道や世論に対して意識が向いていると感じているかを聞いている。結果は次のとおりである。

| | |
|-------------|-----|
| とてもそう思う | 7人 |
| そう思う | 12人 |
| ややそう思う | 14人 |
| 変わらず関心を抱かない | 7人 |

なお、1人が無回答であったが、その理由は「もともと関心があり、関心を持つことは当たり前であるため意識変化を感じない」というものであった。

7. 読みたいと思った本

実践の後に、読みたいと思った本を聞いている。目的は選定した図書がテーマに興味を抱かせるに妥当なものであったかを知ることである。関心を抱いた本があれば挙げてもらい、35人から回答を得ている。

結果は『僕の図書館カード』を挙げた人が14人、『わたしには夢がある』が8人、『ぬすみ聞き』と『リンカーンとダグラス』がそれぞれ6人、『ローザ』が1人であった。

8. 考察

実践後の意識をみると、黒人差別に関する事柄に関心を持つようになってきていることがわかる。また読みたいと思った本を挙げてもらったが、ここから見えたことがある。

関心が最も高かった本は『僕の図書館カード』であったが、これには学生たちは黒人が差別されてきたことは知識として知ってはいたものの、自分たちには当たり前であっても彼らには許されていない行為を具体的に知る機会がなかったことが想像される。この本に描かれている出来事は自分たちの日常の行動範囲でのことであるうえ、主人公とは年齢も近く、場面の様子も想像しやすい。そこで、本を選定する際にはこのような点を意識するとテーマに関心を抱かせやすくできるのではないかと思われる。

9. おわりに

グローバル化により私たちは様々な人種や文化と関わるようになった。人種差別の問題はしかしそれ以前から議論されている。そして次世代に生きる人々にはとりわけ考えていくべき問題であると思われる。教育の場でも、肌の色、言語、能力、文化などに異なる部分はあっても人は優劣をつけられるものではなく、異なる部分を認め合っただけで人類は共生していくことが重要であると伝えられている。そのうえでさらに、差別を生み出してきた偏見など、意識的にある他者への不理解といったものを抱かせない取り組みが様々な形で行われている。

しかしこういった取り組みを行うには、教育・研究分野が専門ではない人間には相当な準備が必要である。実践後には対象者の意識の早期の変容が期待されるかもしれない。

今回実践を行ってみて、こういった講義・講座等を実施する際に、わずかな時間でも、対象者にあらかじめ落ち着いた雰囲気や趣旨に触れる機会を与えて関心を持たせておくことが有益ではないかと感じている。目的を知って主題に敏感になっていれば、吸収力も高まるであろう。それによって場面に応じて自らで考え、適切な行動をとったり意見が言えたりするようになっていくのではないかと。

今回の実践を振り返ると、ねらいは奴隷として生きてきた人がいることや黒人を差別してきたことなどを人類の歴史として受け止めさせることであったとあらためて思われる。また差別の問題は過去の話ではなく、不当な扱いに苦しみ闘っている人が今いること、さらには気が付かないうちに自分自身が差別する側になるかもしれないことを忘れないでほしいと願って企画したことが思いだされる。6週間に渡って人種差別の問題を各自に見つめてもらったが、そこからなぜ差別があるのか、マイノリティはこ

れまでどう状況を打開してきたか、人はどうしたら差別したい気持ちをなくせるかといったことを考えられる人間に成長してほしいとの思いが伝わってれば幸いである。

そこにあらためて『僕の図書館カード』を思い出すことがあればなお喜ばしい。少年は少し周囲と異なる白人の助けを借りられた。必ず味方になってくれる人が何処かにいる。味方になれることはもちろんのこと、差別に苦しむ人が味方になってくれる人を探しだして協力を得られる環境を作っていこうとする学生の姿勢を期待している。

参考文献

- [1] 村上淳子：だれでもできるブックトーク 2, 国土社, (2010)
- [2] 全国SLAブックトーク委員会(編)：ブックトークー理論と実践一, 13-14頁, 全国学校図書館協議会, (1990)
- [3] マーティン・ルーサー・キング・ジュニア, さくまゆみこ(訳)：わたしには夢がある, 光村教育図書, (2013)
- [4] ウィリアム・ミラー, 齊藤規(訳)：僕の図書館カード, 新日本出版, (2010)
- [5] エレン・レヴァイン, 千葉茂樹(訳)：ヘンリー・ブラウンの誕生日, ずずき出版, (2008)
- [6] ニッキ・ジョヴァンニ, さくまゆみこ(訳)：ローザ, 光村教育図書, (2007)
- [7] グロリア・ウィーラン, もりうちすみこ(訳)：ぬすみ聞き, 光村教育図書, (2010)
- [8] ニッキ・ジョヴァンニ, さくまゆみこ(訳)：リンカーンとダグラス, 光村教育図書, (2009)